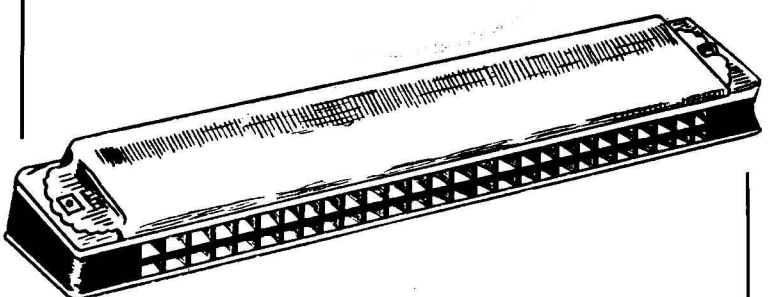
八三九工場

早乙女勝元

未來社

ハモニカ工場

早乙女 勝元



未 來 社

ハモニカ工場

1956年5月31日　第1刷発行

定価 220円

著者との了解で検印を廃す

著者 早乙女勝元

発行者 西谷能雄
東京・文京・東片町

印刷者 上村進
東京・渋谷・千駄谷

発行所
株式会社 未来社
東京都文京区駒込東片町8番地
振替・東京87385　電話(92)6966

乱丁・落丁本はお取りかえします　(あかつき印刷・加藤製本)

まえがき

ハモニカの仕上工だった私は、まだ廿をこしてまもない、貧乏な青年です。

小学校では、六年間もの長いあいだに、たった一つしか甲がもらえず、算数と体操と綴方は、いつもいちばんのニガ手で、きまって乙か丙しかもらえませんでした。そして高等小学校一年——十三才で〝学徒動員〟の下っぱに加えられてから、ちょうど十年、あちこちの工場で、働きずくめに働いてきました。文学の『ブ』の字もわからなかった私は、しかし、汗水たらして一生けんめい、働らくということだけは知っていたのです。

世の中のうごきに、ようやくもの心つきはじめた年頃——私は、わたしの成長期のぜんぶをうめつくしていた貧乏と戦争と……この二つの大きな苦しみの根源について、私なりにあらためて考えさせられました。そしていえることは、——あの苦しみだけは、もう二度と、これからの世代の上に負わせてなるもんか、という結論でした。で、そのために、何かをしたい、私でできる何かをしたい、という気持におされて、貧乏と戦争の中の自分の生いたちを、私は、処女作『下街の故郷』に、まとめあげることができたのでした。

それからいつしか、四年もの長い月日がすぎました。私は、いつかなんらかのかたちで、その後になるものを、かきたいかきたいと、思いつづけてきました。そうして、工場の中で、私はたくさんのメモをとりはじめたのです。働いている人々の話のやりとりと、一つ一つの動き……そして、それらの動きの、ずっと奥底にひそんでいるたくましい力とを。

私は、わたし自身、この中で動いてゆくうちに、私たちのおかれている状態の息苦しさと、そうさせているものに対して、はげしい憤(いきどお)りを感じてきました。同時に、そのもとで、すこしづつ、すこしづつ動きだしてゆく、働らく人たちのうつりかわりのさまを、無力ながら、なんとか『小説』にまとめあげよう、と思いたちました。……しかし豊かな才能なぞ、何一つもちあわせていない私が、働らきながら、六百余枚をまとめあげるのは、なみたいていのことではありませんでした。

——寒い冬の夜も、あつい日曜のひるも、すべてそのためにささげました。なんどもなんどもイヤになりました。でも、二度や三度絶望することをおそれて、一体、何ができるもんか、と、かきつづけました。そしてちょうど一年半……ここにその結晶が、『ハモニカ工場』というかたちで、みなさんのもとにおくれることを、心からうれしく思います。

私はここで、かつて私と一緒に働らいていた職工のアンチャンや、私の母、それから隣りの家のおばさんたち（つまり最大多数の働らく人達）に、喜んで読んでもらえる小説、しかもその中で、何か、生活のかてになることのできる小説——そういうものにしたい、と、せいいっぱいの努力を、ここに傾けました。にもかかわらず、できあがって、今一度よみかえしてみますと、この長篇は、あちらこちらに、目を被いたくなるような不完全な個所が、いたく目について、自分自身恥しくもおもいます。つっこみがたりなく、一人びとりの若い青年の個性が、充分にえがききれなかったうらみもあります。

それにしても、『下街の故郷』からひきつがれたこの作品は、さらに関連あるその次のものに続くものであるということ。この作で未解決の問題を、次の作で、より完成したものに、より豊かなものに生かそう、と思っていることをつけ加えて、これはこれなりに、次への《土台》にしたいと思います。……ほんとう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に、みんなのためになるいいものを、かきたいとおもいます。そのために、まずこの自分が、いいこと・いい勉強をしよう、と思います。自分がいいこと・いい生活をしなければ、大ぜいの人のためになる小説などかけやしないと思うからです。

そのいみで、これをよまれたみなさんの中に、すこしでも、いい生活・正しい生活をしよう、そして、その生活と、生活の中からの声が、ドシドシまとめあげられるように、そのために、この作がツメのあかほどでもよい、一ツの〝きっかけ〟を作ることができればよいのだけど……と、そのことばかり祈っております。これが、小説にはいささか奇妙と思われる作者のまえがきを、あえてかこうと思いたった最大の理由です。

なお、関係者の誤解をうむおそれをなくすために、あえてしるしますと、この小説の舞台になっているムラタバンド製作所は、「虚構（イマジョン）」の世界であります。従ってこの作は、たくさんの『事実』にもとづいて、それを材料にしていますが、一応、自由なかたちの、私の『創作』であること——内容をいろいろに想像される方があっても、それはまったく作者の関与しないものであることを、つけ加えておきたいと思います。

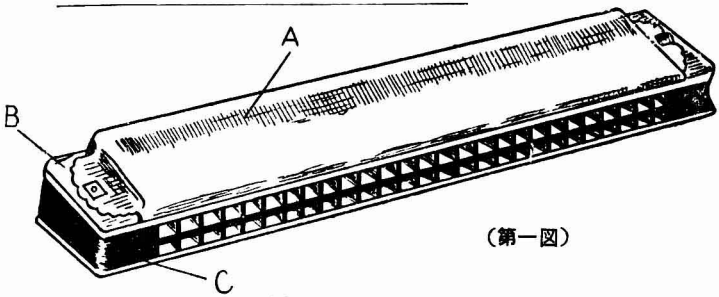
さいごに末筆ながら、この作をつくりあげるまでに、いろいろとはげまして下さった方々、とりあげて下さった方々に〝ほんとにありがとう〟と、心からのおれいを申しあげます。

一九五六年三月廿六日

春の足音をききつつ

早乙女（さおとめ）　勝元（かつもと）

ハモニカ（HARMONICA）の構造



（第一図）

（A）カバー　Cover（装飾板）

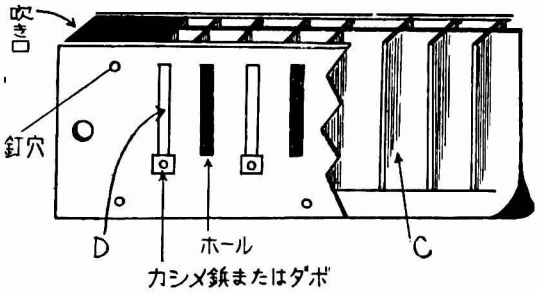
うすいきれいな金属板、たいていは真鍮にメッキをかけたもので、表面には製作所の名称とか、ハモニカの商標なぞのネームが刻印されてある。装飾のほかに、音の響鳴板の役もかねる。

（B）プレート　Plate（台金・真鍮板）

カバーよりは厚い真鍮板が使用され、２１穴とか２３穴とかの種類によつて、それだけの（吹口と仕切りと同数の）窓がうち抜かれているが、これをぞくに笛穴（ホール）とよぶ。

（C）ウッド　Wood（木部）

穴数だけの溝が櫛形にくりぬかれており、材質は楓を第一として、ついで、ブナ、ケヤキなどが使用されている。ウッドの上に小さな釘でプレートが定着される。



（第二図）

（C）前述のウッドで、プレートに定着されたリードが、吹口から送られた呼吸によつて、振動する余地のあるだけ、個々の溝が正確にくりぬかれている。

（D）リード　Reed（弁・震動板）

特殊配合の真鍮板で、呼吸によつて振動し、発音する。吹いて鳴る音（吹音）のリードは内側に、吸つて鳴る音（吸音）は外側に定着されている。低音から高音になるにしたがい、リードの長さは短かくなる。このリードの上下にキズをつけることによって、音の高低が微妙に決定されるのである。

ハモニカ工場　もくじ

1　てがみ……九
2　善介……一一
3　くろい男……一四
4　発火金……一六
5　自衛隊……一七
6　チョエ……一九
7　一つの衝突……二〇
8　くらやみの中……二四
9　うたごえ……二五
10　下の上の家……二八
11　ふられっぱなし……二五
12　嵐・・・……二三
13　その日……二六
14　素晴らしいもの……二八
「ハモニカ工場」について……野間　宏……二五

ハモニカ工場

――一九五四年十月一日朝より
同月三十一日夕方までの物語――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1 てがみ

——下町。

したまちは、仕事の町であり、貧しいもののふるさとである。

そこには、ガタピシと歪んで、今にもよろめき倒れそうな、小さな家と家とが、いくつにもおれまがった路地に、ささりこむように密集している。今にも倒れそうにみえて、けっこう倒れないのは、満員電車のように隙間がないからだ。まっくろによどんだおはぐろどぶは、流れることをしらないまま、この町を自由にのたくって、荒川放水路の方にむかってゆく。

夕方——くもって、もう、うす暗くなりかけた路地を豆腐屋のラッパの音が通った。

ニシンを焼くにおいや、あたたかな味噌汁のなつかしいにおいが、鼻の穴をマックロにする煤煙とまじり、ゆっくりと尾をひくように、ひくい軒から軒をつたわって、やがて下町の空にただよう。

隅田川をはさんだむこう岸には、くろい工場の屋根のつらなりが、山脈のようにつづき、煙突が何本も、空につきささっているのがみえる。これらの煙突から、いっせいに黒い煙が吐きだされると、朝だ。早番の鋲付の音が、水面をはねかえってひびきはじめ、人々が、いっせいにきぜわしく町中に動きだす。そうして、眠っていた町が、目をさます。くんせいのようにひからびた『オンボロ小学校』にむかって、吸われるように動いてゆくのは、小さな子供たちの姿である。

ところで、この小学校の、白いコンクリ塀のわきで、もうずっと前から、小さな一台の、ひどく古くさい『市内電車』がエンコしている。そのままいつまでも動きそうにない。が、よくみると、これは動かないのが道理である。車がないのだから。

——八時零分！

うゥーッと、川ぶちの紡績工場のサイレンが、冷酷なうなりをあげた。この瞬間から、一日の活動が開始されるのだ。と、同時に、「うわァーン」と何かがいっせい

に、この市内電車の中で、ときの声をあげ、それはサイレンが鳴り終ってもやまず、そのままぶっ通し、夜までがなりたてた。ド・レ・ミ・ファのあらゆる音が、何の音階も調和もなく、めちゃくちゃにとびだす。まるで、音のかたまりだった。

しかも、この昔の市内電車によくにた奇妙な建物は、片面がでかいガラスでしきられていた。つまり、中で誰が何をしているか、外から一目でわかるという具合にできている。いねむりでもしようものなら、外からは、ちょうどテレビでも見ているようなあんばいに、よくうつって見える。これはわがムラタバンド製作所の心臓部、ハモニカの音をつくる作業部屋で、ずばりに『波動室』とよばれている。

この波動室の中をすこし説明するなら、まず座席は四ツ、四ツとも、小さなガタガタの尻かけ椅子だ。一つ一つが一坪四方にみたない部屋、『公衆電話』のようなせまくるしい部屋で、となりと、となりは、ひどくぶあつな壁で、ピチンとしきられている。自分の音が外にもれないように、外からの余分な雑音が入ってこないように、防音装置がしてあるのだ。外からの音がきこえないのは、この商売にとってさいわいであるが、

「オーイ」と、どなっても、すぐと目の鼻の先にとどかぬというのは、人間様にとっては不幸である。一日中、オシャベリ一つできず、唖のように、ただハモニカの音ばかし、きいていなければならないのだ。

石田善介は、はじめてこの工場にきて、はじめてこの市内電車の中の『公衆電話』にとじこめられた時、この世界がまるでハモニカでできているのではないか、と、思った。自分たちが何を喋るにしても、それはドレミファ……という、あのハモニカの音でしか、喋れないのではないか、とさえ思った。そんなことを、となりの部屋にいる青年にいうと、

「でも、すぐなれちゃいますよ」

と、にっこり笑っていう。笑うと、目がすうッとほそくなって、白い歯なみが、健康そのものをあらわしている。子供ッぽさが、まだぬけきらないが、実にのびのびとして、気持のよい青年だと思った。

「……ひょっと思うんだ、おれの顔、しまいにハモニカみたいになってゆくんじゃないかって。ほそくて、つるッとしてて、キザで鼻もちならなくて。——だって、長

いこと同じ仕事をしていると、いつのまにかそんなような顔になってくるから、おそろしいね。小学校の校長先生なんてのは、カドがとれて、どこの学校でも、みんなおんなじような人ばかしいるし、百姓は、やっぱし百姓みたいだしねえ……」

「ぼくは、いぜん機械工場にいたけど……」

と、この青年はいった。

「見習工で、やっぱり一日中、おなじ一ツの機械にしがみついてたンです。たいした仕事じゃないけれど、目ははなしちゃいけないんだ。自動オクリをかけて、機械が一人でゆっくり動いているのを、朝から晩までみてる。すると、まるでロボットみたい。しまいに、なんだか自分が〝自分〟でないようになり、人間の世界から退化してゆくみたいなんです。心細くなって、おもわずホッペタをつねってみる……。そんなことじゃ、どこもここもおなじですねえ」

なぞと、親しげな調子で話してくれた。

これが、鈴木正一だった。善介より半年ほど前に、この工場に入った彼は、今年廿才だという。となりの部屋つまり、第一号室の公衆電話の中に陣どって、ときどき部屋がひっくりかえるような声で歌をうたっているのが、まるで遠くの遠くの声のように、二号室の善介にきこえてくることがある。その逆どなりの、三号室には、頭が左にかしいで絶壁になっている安藤金之助がいる。島崎雪子の大のファンで、あの情熱的な瞳と、口もとがなんともいえないヨと、そのプロマイドを何枚も壁にはりつけて、口ぐせのようにいう。

ジリジリした西陽の光と熱が、真正面にとびこんできて、部屋の中にかけた温度計の水銀柱が、うなぎのぼりに上る真夏。入ってまもない善介は、製品をもって、はじめて三号室へいってみた。せまい部屋の中は、今にも燃え上るかとも思われるのに、ぴったりと窓をしめきり、金之助は、何かビニールの大包みを頭の上にのせて、顔をしかめていた。そこから、水がたらたらと頬にしたたりおちる。なんだろ？　と思ったら、頭の上に氷をのせて、仕事をしているのだった。しかも、毛むくじゃらのゴボウのような足を、下のバケツの水の中につっこんで――。

「なんか、においしない？」ときく。

「におい？」

「オレのにおい」
「ああ、君のですか？」
「なかなか、フラッシュだろ？」
これにはおどろいた。どうやら彼は、フレッシュということばを『フラッシュ』だと、思いこんでいるようだ。なるほど写真機のフラッシュは、ぱっと光るかぎりにおいて、新鮮（フレッシュ）にはちがいあるまい。
どんなに暑くとも、休憩の時いがいは、けっして窓はあけられないのだ、ということを、この時から善介は知った。窓をあけると、音が外に散って、波動（トレモロ）がききとりにくく、従って仕事がしにくくなるからである。しかし、ここで一日中窓をあけずに仕事をしていたら、部屋中が『自分』の空気で、もう、いっぱいに充満してしまう。
自分の空気の匂いはわからぬが、人の部屋のそれは、なんともいえぬカサカサした、枯葉のような男のにおいだった。そのことを、金之助は、『フラッシュ』という独特なことばを借りて、いったのである。
これをきっかけにして、善介はこの愉快な男と話すようになった。金之助は、ある時はひどく茶目で、おもしろいしぐさをして、女工達を笑わせたが、たまに、一人でじっと石のように、だまりこくっていることが、よくあった。壁の一カ所をみつめて、頬杖をつきながら、チリチリと煙草を吸いつづける彼は、はッとするくらいに淋しそうであった。そういう暗さが、彼のどういうところから出てくるのか、善介には、まるで見当がつかないのである。
しかし、もっとふしぎな人間が、さいごのとっぱじりの四号室にいた。もう三十に近いこの青年は、朝、いったん公衆電話の中に入ると、そのまま終業のベルがなるまで、姿をあらわさなかった。めったに便所にもゆかないらしく、昼休みも、その中で弁当をくって、昼寝をして、けっして外にでず、十二時四〇分、始業のベルが鳴ると同時に、起きなおって、またハモニカをとる。すこし耳も遠いらしく、挨拶をしても、ほとんど返事をしないばかりか、笑ったこともなかった。
「あ奴は、げのじょうっていうんだ」
金之助が教えてくれた。
「げのじょう？」
「そうよ、下の上さ」
「なんですか、それは？」

と、きくと、正一が、そのわけを教えてくれた。ほんとうは横田功というが、小学校の時の、通信簿の平均がいつも『下の上』しかもらえなかったからだという。気の毒な呼び名をつけたものだと思った。しかし「下の上……」と、口の中でつぶやいてみると、それはひどくユーモラスな余韻をもってひびいた。波動部の中では、この工場にもっとも古く、波動工として年期をいれただけあって、さすがに手ぎわのよい仕事をやってのけた。

善介が、たまにひどい品物にぶつかって、それを教わりに四号室にゆくと、下の上は、意外に親切にそれを教えてくれた。そんなところから〝善さん善さん〟といって、たまには、彼の部屋に「油をうり」にくるようになると、めったに笑ったことのないこの青年が、年若い正一たちを相手にして、けっこう冗談をとばすようになっていた。

ところで、一日中ハモニカをふいている商売だなぞというと、ひどく楽しげなひびきをもってきこえるが、じっさいはそんな生やさしいものではないのだ。彼らはただ、ドレミファだけをふいている。きのうも今日も、低音から順ぐりに、レドファミラソスイド……と、そればかしくりかえしている、という商売なのだ。

複音ハモニカのもつ最大の特色、音色の柔軟さのみなもとになっている音の波動（トレモロといわれる）を、四人は、この硝子で透き通った市内電車の中で、一手に作ってゆくのである。

右手の指に、ヤスリとノミとキシャゲ（ノミの一種）をもち、それを五本の指のように、自由自在につかう。目にもとまらぬ勢いで、音をあげさげしてゆく。ふゥーンとうなる金色の細長い弁（震動板）の動きと、音が、四人の全神経の集中してゆくところだ。ド・レ・ミ・ファの、一つ一つの音の基準が、すべて彼らの長い経験をつんだ『耳』だけで、決定される。あのべらべらしたうすい弁の上下を、瞬間的にけずることによって、音の高低は敏感にきめられるのである。

もっともふだんは、これに波動台をつかう。オルガンにに機械で、ばたばたと足でペタルをふみながら、空気をだしいれし、その上のハモニカを順次ずらして鳴らすのだが、鳴りの悪いのにぶつかったら、いちいち口でふかないことには、能率はあがらないのである。口は真

鍮くさくなり、冬なぞ、氷の棒を口につきいれられたように、唇がしびれて感覚がなくなってくる。真鍮板の上の埃で、唇が道化師のようにくろくぬりつぶされてしまう。

楽器屋の店頭の最前列をかざる≪誰でも知ってる日本一の名器≫ムラタバンドは、夏でも冬でも、こうして一本のこらず、この市内電車の中を通過してゆくのだ。

今、突然三号室の窓が、がらっと音をたてて、大きくひらいた。中から、金之助の顔が、日向の猫のように、目をほそくして、外にあらわれる。やがて、彼は上半身を窓にのりだした。そのひろい胸に、秋の陽がいっぱいにはねかえっている。

「おうーいッ」

それで、二号室の窓が、またすっとひらく。

「なんだい、金之助氏」と、これは善介だ。

「――きのうの給料さ」

「おッ、ありゃ、ちょっとひどすぎるなァ、ぺらぺらじゃねえか」

「てんで、くさっちゃうよ」

いつのまにか、反対がわから正一が首をだして、善介のいうより先に、つの口している。ひと仕事が終ったと思うころ、誰がというのではなしに、みんなは、いいあわせたように、仕事の手を休めて一息ついた。が、困ったことに、みんないっせいに一息つくと、ハモニカの音がまったくきこえなくなるから、事務所の方からは、すぐにそれとわかってしまう。だから、品物の一本を波動台の上にのせて、ダベりながらも、軽くペタルをふんでいなければならないのだ。

「いくらへった？」

ユキユキとふみながら、善介がきいた。

「大枚四百卅円！」

「なんと、俺なんざァ六百円だぞ。いいツラの皮だい！いいかげん、コレんなっちゃうよ、なあ……」

金之助は、左手の指で頭の上に丸をかき、クルクルパーをやってみせた。――この夏場をこしていど、ハモニカの売れゆきがエアポケットのようにおちたのだ、と社長はいうが、じっさい、先月はひどい賃下げになっていた。ハモニカ界の巨匠村田西峰先生特製のムラタバンドでさえ(といって、彼らはこの大先生を、写真いがいに一度もみたことはなかったが)真正面から、不景気のあおりをくらった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.